

戦争体験

齊藤 美佐代（昭和4年生まれ）

昭和16年12月8日、朝礼で集合した1,700人の生徒を前に校長先生から戦争が始まった事を話され、身のひきしまる思いをしました。始めは戦果良く喜んでいたのも束の間、段々と戦況は思わしくなくなり、食料の欠乏から始まり、若者の戦地への召集、学童の疎開、私達上級生は軍事工場での仕事と一生懸命でした。生活面では銭湯の高い煙突から出る火の粉により夜の入浴中に空襲があるので、なるべく明るいうちに入浴を済ませ、夜は着のみ着のまま寝ました。3月10日は昔、陸軍記念日と言って陸軍の兵士を称える日でした。丁度その日が弟の誕生日で食料難の折柄、どこで調達したのか母が小豆を煮て赤飯の用意をしていてくれました。9日の夜、私達子供に少しずつ砂糖を入れて汁粉がわりに食べさせてくれました。久しぶりの甘い味のうれしかった事、今は不自由なく食べられる菓子より、その時の味が忘れられません。

そして床についた瞬間空襲警報のサイレンが鳴り響いた時には、すでに焼夷弾が家に落ち周りは火の海となりました。頭上近くに敵機を操縦している人が目の前に見え、家の上を抜けて行きました。こんなに近くに操縦者を見ると足がすくみました。必死の思いで外に出ましたが近所には人の姿もなく、どうやってどこへ逃げたか解りませんでした。逃げた場所には大勢の人達が続々集まって来ましたが、荷物に火が付き被っていた防空頭巾にも火がつき大変。でもどこかへ逃げなければならず夢中で逃げました。子供を背負った奥さん、火傷を負った子供はすでに死に、泣きわめきながら抱き合っただけで火の中に写し出されている光景は生き地獄そのものでした。やっと生きていたんだと父母弟妹と手を取り合っただけで泣きました。真黒になった沢山の死体を乗り越え、自分の家を探しあて、跡形も無くなった家。その後も何遍となく空襲警報に遭いながら空はまだ火の反射で赤々としている中で1週間東京にいましたが、その時過ごした事は夢のようです。長蛇の列に並び、やっと上野駅から汽車に乗る事ができ、着のみ着のままでしたが、無事新井の駅に着きました。ところが、昭和20年の年は大雪で、雪で駅舎が埋まっており、降りる事も出来ず、母の実家の能生まで行きました。お世話になった伯母の家は、家の前がお寺でそこにはまだ小さな学生が集団疎開をしており毎日のように逃げ出す子供をさがすのに大変でした。4月末まで世話になった伯母の家から父の実家に移りましたが、食料難の時期に5人もの世話は本当に大変だったと思います。

5月に入って父の知人から日普工場を紹介していただき、妹と2人下宿からの工場勤めです。8月のお盆に家に帰っていた時、15日に天皇陛下の玉音を聞き、戦争に負けて終結した事を知りました。その後父は過労と今後の生活を苦しみに病床に着き、母は馴れない農家の生活に苦勞をしました。僅かばかりの財産、幸福な家族の幸せを奪い、一瞬にして無になり、その後の生活は惨めなものでした。

でも今の主人と家族の人々に巡り合い、嫁として迎えてもらいました。全く知らない農家の生活にとまどいながらも、幸せをいただきながら過ごす今日です。振り返ればいつしか60年も過ぎ、

記憶も薄れてきましたが、戦争の恐ろしさは忘れる事は出来ません。日本は現在は幸せな生活を送っているとはいえ、毎日の痛ましい報道に心配も募るばかりです。

戦争の無い幸せな世の中になるよう祈るばかりです。